

高速化でアジアの中核市場に

今年5月に東京工業品取引所（東工取）が導入した「世界最先端」のコンピューター取引システムは、同取引所の先進性を世界のプロトレーダーにアピールする大きな武器ですが、それだけで市場の取引が活発化するわけではありません。ハードと同時にソフトが有効に機能して、初めてトレーダーを東工取市場へと導くことができるのです。

ここでいうソフトとは制度面の整備を指します。「100分の1秒」という高速の注文処理速度を生かすための「コロケーション・サービス」の提供や遠隔地会員制度の導入、トレーダーに向けたコスト削減提案がそれです。

トレーダーには致命的

コロケーション・サービスは、トレーダーの拠点が原因で起きる、取引所からの価格情報取得や注文到達にかかる時間格差を解消するための措置です。

トレーダーが取引所から受けた情報に基づいてコンピューター端末から発した売買注文は、文字通り「光の速さ」で東工取のマッチング・エンジンに届けられます。これまでの常識ならば、トレーダーが米国にいても香港にいて

も違いはないと考えていたはずですが。

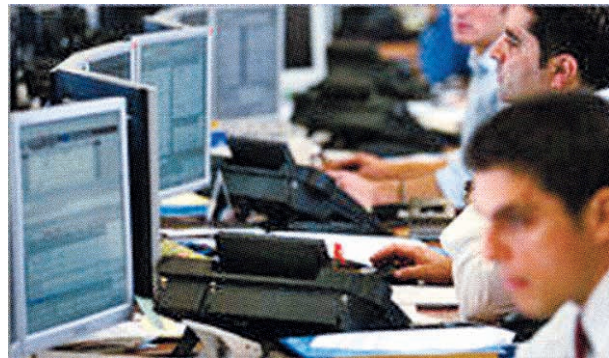
しかし、1秒間に何百、何千もの注文の発注とキャンセルを繰り返して薄利を積み重ねるタイプのアルゴリズム・トレーダーにとって、ライバルとの間で生じる極微小の時間差は致命的となり得ます。

そこで世界の先進的な取引所は、トレーダーの取引サーバーを取引所システムに物理的に近づけることで時間差問題の解決を図るようになったのです。これがコロケーション・サービスで、東工取も指定ベンダーの協力のもと、新システムの稼働と同時に同サービスの提供を始めました。

コストのかからない取引

ですがアルゴリズム取引をするヘッジファンドやプロップハウスなどは、必ずしも東工取の会員ではありません。ということは、本来的には自らが取引所システムに直接注文を伝達することはできないはずですが。では東工取の会員経由で取引をするかといえば、それは取引時間を遅らせることになってしまいます。

そこで東工取の受託資格を有し、か



画面を見つめるトレーダー。米国の証券市場で始まった「アルゴリズム取引」はあらゆる金融市場で使われ、ロンドン証券取引所では2006年時点で「アルゴ占有率」が40%を超えた

つ日本商品清算機構（JCCCH）が定める特定の条件をクリアした先物ブローカーに取引清算を委託することを約束した場合に限り、取引所システムへの直接アクセスができるようルールを整備したのです。これが「ダイレクト・マーケット・アクセス」（DMA）です。

もちろんトレーダー自身が東工取の会員資格を取得することも可能です。しかし、従前は国内に拠点を持つことと、最大250万円の資格取得料が必要とされていました。どちらも大きなコストです。そこで拠点を持たなくても良いこととし、同時に取得料を10分の1（最大250万円）に引き下げること「新しいタイプのトレーダーを誘致



コロケーション 「共通の場所」を意味する英語。売買注文の高度な自動発注ソフトの普及で、ここ数年、米国を中心に急速に発達した。いまや1000分の1秒の処理速度を持つ取引システムが開発されるなど、高速化はとどまるところを知らない。

する」との戦略を実行したのです。

世界に向けた東工取の競争力強化戦略はこれだけではありません。取引商品のラインアップの充実や取引時間の24時間化などを手掛かりに「アジアの中核市場」を目指します。